



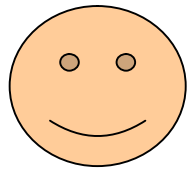
<個別支援計画>研究 WE-Collaboration  
教育と福祉・保健の連携による障害児支援を考える

# 教育と福祉の連携について ～成人期の事例を通じて～

---

社会福祉法人 オープンスペースれがーと  
甲賀地域ネット相談サポートセンター  
生活支援ワーカー  
菅沼 敏之

# 甲賀地域ネット相談サポートセンター 業務体制(平成20年度)



利用者

相談



相談支援

甲賀地域ネット相談サポートセンター

## 所長・総合調整担当

- ・地域の福祉課題の総合的な調整・課題の解決

## コーディネーター

- ・センターの第一次相談窓口としての機能
- ・支援チーム作りが重要な個別支援ケースを担当
- ・サービス利用計画の作成(相談支援専門員)

## 生活支援ワーカー

- ・一人暮らしやグループホーム等で暮らす人の支援
- ・生活と就労の両面から支援を実施

## ケアマネジメント従事者

- ・利用者の望む暮らしを実現するケアプランを毎月作成
- ・継続した関わりの中で必要な支援のモニタリングを行う

## 発達障害者キーパーソン養成事業担当

- ・発達障害者支援の研修を主目的とした滋賀県独自の事業の担当

**事例①**

**学齡期よりひきこもり状態にあったケース**

**事例②**

**就労と生活の両面を応援する**



## 事例①

---

### 学齡期よりひきこもりだった人への支援

- Aさん 男性 20歳
- 知的障害 広汎性発達障害
- 小・中学校(普通学級)～養護学校高等部卒
- 両親、弟(二人)、祖母の5人暮らし



## これまでの経過

---

- 幼少期より言葉に遅れ。
- 小学校より学習についていけず。特別支援学級への勧めがあったが、家族の強い希望により6年間普通学級で過ごす。
- 中学1年より学校に居づらくなり不登校に。
- 中卒後、養護学校高等部に在籍。送迎車に乗れず母が送迎。しかし全授業日数の1/3ほどしか出席出来ず。
- 養護学校卒業後、通所施設への進路に定まったが家から出ることが出来ず、ひきこもり状態となる。



# 課題・支援の必要性

---

## ①ひきこもり状態から脱却するためには・・・

- 「自分は出来る」という強い思い。
- 失敗経験はプラスにならない。
- 母の過大な期待(やればできる) → 本人にとっては負担感
- プライドが高い → 「企業に勤めたい・・・でも人に会いたくない」
- 無理強いできない。更に閉じこもってしまう可能性。

## ②本人の思いを聴き取るためには・・・

- 学齢期に体験した対人的ダメージが残っている
- 母が窓口でなければ連絡が取り合えない状態
- 信頼関係を結ぶまでに時間が掛かる

# 個別支援会議が 支援体制を作り上げる第一段階・・・

---

## ➤ 議題は・・・

- ①ひきこもり状態からどのように脱却を図るか。
- ②日中活動先の検討。
- ③母の過大な期待をどのように和らげていくか。



# 個別支援会議で話し合ったこと…

---

## ①就労に対する意識変換（通所施設利用の意識付け）

- 企業でのストレスに耐えることは難しい
- 実習時のマイナスイメージから通所施設利用に拒否を示す
- 本人のプライドを尊重しながら、「企業就労より通所施設」という意識付けを行うことが必要

## ②対人面でのフォロー

- 対人関係を作ることができない
- 生活支援ワーカーが仲介的な役割を担い対人面でのフォローを行っていく必要がある

## ③外出時のフォロー

- 就労意識と「自分は出来る」というプライドを外出のモチベーションに繋げる
- 外出時に付き添えるような本人との信頼関係を作ることが必要。





# 個別支援会議での決定事項

---

## ①コミュニケーションの方法を変える

- 携帯電話のメールを活用
- 直接的にコミュニケーションをとり信頼関係を結ぶ

## ②企業見学、ハローワークでの就職相談

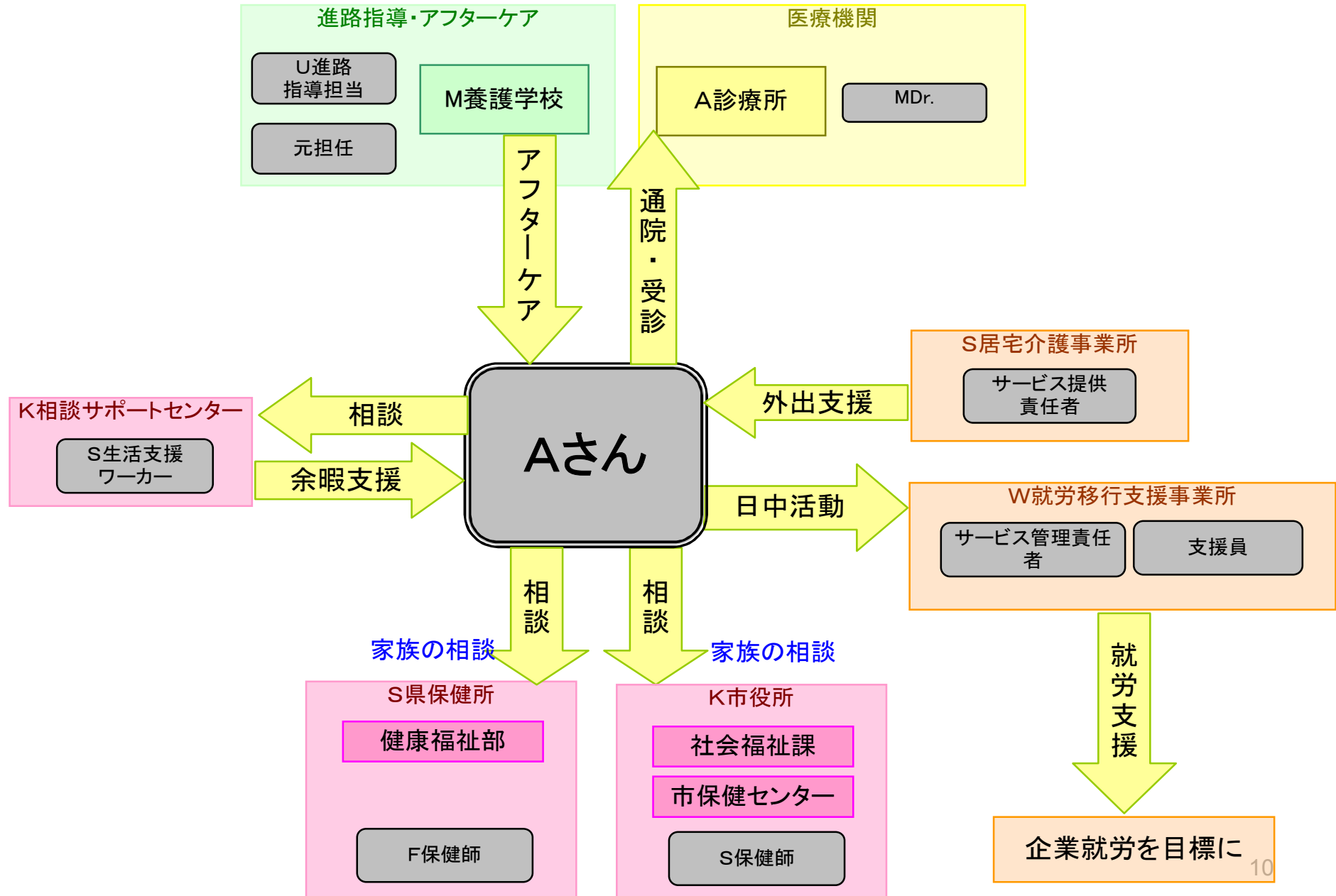
- 実際の就労現場を見学することで企業の厳しさを体験してもらう
- ハローワークで相談し就職の難しさを自分自身が経験してもらう
- 通所施設からスタートすることがマイナスではないことを促す

## ③定期的に個別支援会議を開催

### 医師のアドバイスを取り入れ支援内容を検討する

- 本人の状態観察・支援経過を慎重に精査し進めていく必要がある
- 精神科医の専門的な見解を支援内容に取り入れる
- 医師より母への助言(過剰な期待を和らげる役目)
- 支援の方向性の一本化する(迷いが出たときの修正)

# Aさんの支援体制





## そんなこんなで2年が経過・・・

---

### ①通所施設への見学・実習へと繋がった

- 初期段階では拒否していた通所施設見学・実習が可能に。
- 生活支援ワーカーが本人と施設の関わりを増やし本利用へと繋がりたい。

### ②対人面での拒否反応が少なくなった

- ハローワークでの相談経験を重ねたことで人と話すことへの抵抗感が低減した。
- 施設実習を繰り返し行うことで自信に繋がり外出に抵抗を示すこともなくなった。

## 現在のAさんは・・・

---

- 実習していた通所施設に正式利用。作業能力が高く大事な戦力として期待される存在に。  
8年後(?)の就労を目指す。
- 自信を身につけ、自分から積極的にコミュニケーションがとれるようになった。
- 笑顔が増えた。  
元担任先生主催のクラス会を楽しみにしている。

～このまま笑顔で生活を送ってほしい～





## 事例②

---

就労と生活の両面を応援する！

- Bさん 男性 20歳
- 高機能自閉症と診断を受けている
- 小・中学校（普通学級）～養護学校高等部卒
- 両親、弟との4人暮らし（姉が別居）
- 大手電子機器製造会社に就労中



## これまでの経過

---

- 2歳を過ぎても言葉が出ず。自閉的傾向と診断。
- 小学校は普通学級に在籍。同級生から言葉によるいじめを受け不登校傾向に。
- 中学校は特別支援学級に在籍。同級生からの嫌がらせは続き興奮してパニックを起こすことも。
- 中卒後、養護学校へ。元同級生が自宅にまで嫌がらせをしに来るように。
- 卒業後、障害者雇用にて地元企業に就職。元同級生からの嫌がらせも続いており、家族の心配は絶えない状況。



## Bさんの特徴

---

- 挨拶を含め自分で人に話しかけることが苦手。
- メールや筆談をもちいると自分の思いを表現できる。
- 人を待たせたまま自分の気になっていることをしてしまうなど、周りからは身勝手と受け取られてしまうような行動が多い。
- 時間を考えて行動することが難しく、しばしば時間に遅れてしまう。
- 過去に受けた言葉による嫌がらせの記憶が度々フラッシュバック。興奮を助長させトラブルに。
- ストレスが溜まるとイライラし周囲の人に対して拒否的、被害的になる。



# 課題・支援の必要性

---

## ①日常生活上において・・・

- 元同級生の嫌がらせが続く状況。フラッシュバックから不安定な行動を起こす。
- 一度興奮状態になると家族でも抑えられなくなる。

## ②就労生活上において・・・

- 同僚とのコミュニケーションがうまく取れずストレスの要因に。
- 自分なりの解釈から修正することが出来ない。  
社内ルールからはみだしてしまいトラブルを起こすことも。
- 興奮状態になると、暴言や時に暴力を振るうような素振りを見せる。会社内で問題になっている状況。





## 生活支援と就労支援は一体である！

---

➤ **会社と一緒に支援内容を検討する。**

- 個別支援会議を会社で行っている(月一回)。
- 会社との信頼関係を結ぶことが次に繋がる。

➤ **生活の乱れが就労を狂わせる。**

- 生活の不安定さは必ず就労に影響。
- 生活支援だけをしていれば良いということはない。

⇒ 一体的に支援を組み立てることが重要。



## 現状の支援内容

---

### ① 地域の警察からの協力

- 自宅周辺への夜間巡回を依頼。
- 「警察として協力する」と了承を得る。

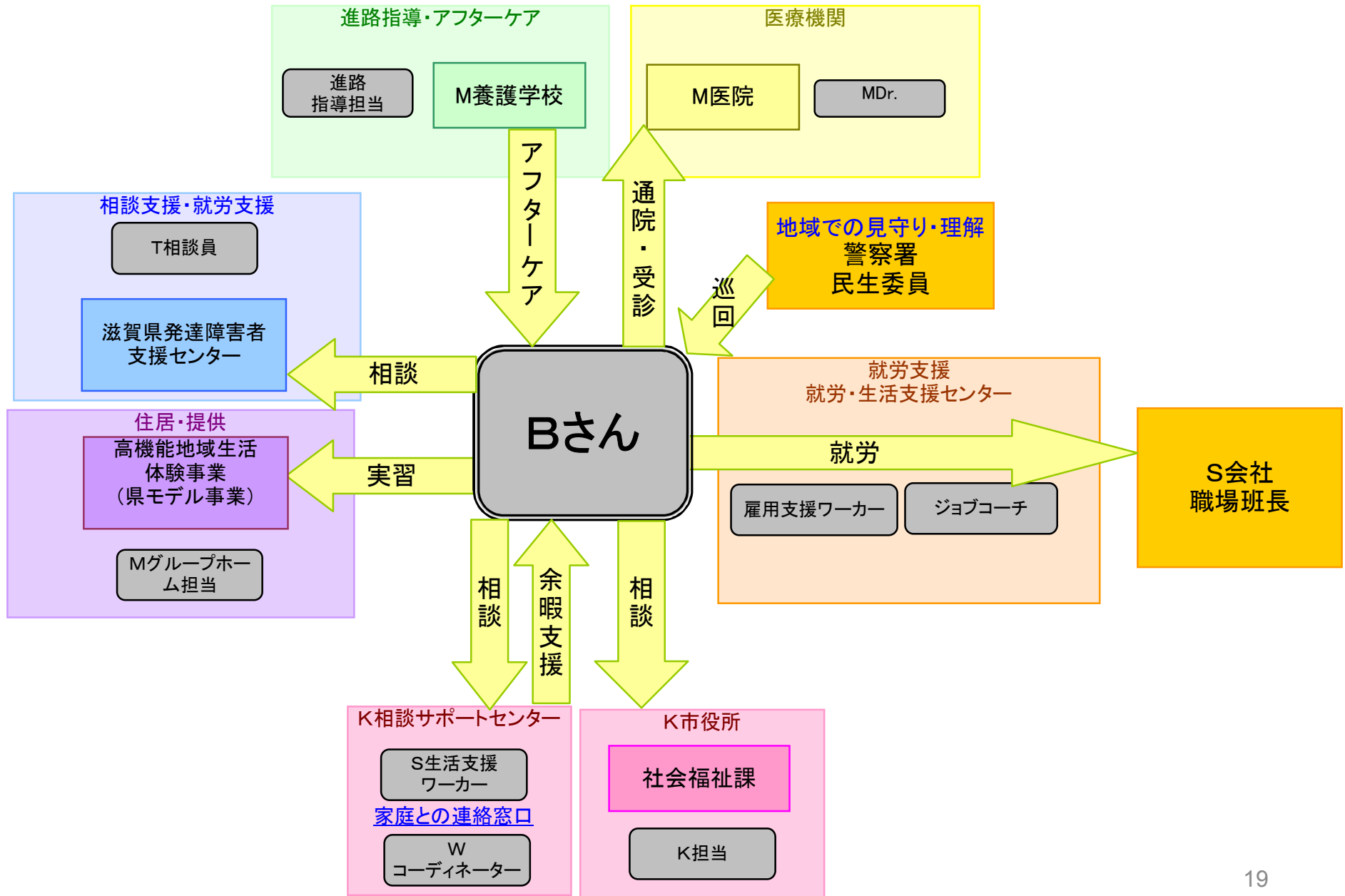
### ② 本人とのコミュニケーション

- 生活については生活支援ワーカー、就労についてはジョブコーチが担う。メールや筆談を活用。
- 元担任の先生がメールでやりとり。思いを聞き出す一役。

### ③ 個別支援会議の定例化

- 生活支援と就労支援の情報共有を密に。
- 定例化することで会社に安心感が生まれている。

# Bさんの支援体制





## 現在のBさんは・・・

---

- 嫌がらせは終息気味。本人も落ち着いている。
- 社内の人間関係は改善できていない。  
会社の理解は十分にある。本人の自覚を促すことも必要か。

⇒会社と連携をとりながら継続した支援を導入する必要がある

～先はまだまだ長く続いていきそう・・・～

## 二つの事例から・・・

# 成人期の支援に大切なこと・・・

- ◆ ライフステージの境目で支援を途絶えさせてはいけない。  
(支援計画の連続性)
- ◆ 成人期の生活支援には終わりが無い。  
(連携・協力の重要性)
- ◆ 先生とは・・・どれだけ歳を重ねても頼れる存在。  
(信頼関係の継続性)
- ◆ 生活場面は「頑張る」ステージではない。  
(「ほっ」とできる環境作りも必要)